愛媛大学 南予水産研究センターから「こんにちは」

南予水産研究センター所長
山内皓平（こうへい）先生

始めまして、素晴らしい愛南町に来ました

愛南町は恵まれた環境を持つ、日本でも有数の養殖場がある地域です。この町に、本年4月1日、産官学の協力のもと、愛媛大学が「南予水産研究センター」を設立しました。

かつての国立大学は、現在、国立大学法人として大学を運営していますが、文部科学省から交付される運営交付金の減額や少子化による入学者人口の減少など、大学の運営は厳しさを増しています。

従って、各国立大学法人は、当然のことながら、財政の立て直しを迫られています。このような状況の中、社会貢献を経営の理念として掲げている愛媛大学が、松山市から遠く離れた愛南町に研究センターを立ち上げ、人と資金を注ぎ込んだことは、国立大学法人の中でも極めて珍しいことです。

さて、大学には、積み重ねてきた研究成果を更に進展させ、これらを活用して、人間生活を豊かにする責任があります。また、地球に棲（す）む私達にとって大切なことは、地球環境を護（まも）り、環境に負荷を与えないようエネルギーを利用し、食糧問題について考えることです。私達、人類にとって、生活を維持する上での重要なキーワードは、環境、エネルギー、食料と言えるでしょう。現在、地球規模で爆発的に人口が増加していますが、増加し続ける人口を養うための人間活動が、食糧や環境といった諸問題を起しています。私達も、この地で、これらの問題を考えていければ素晴らしいと思います。

当センターの主な目的は、生命科学の最先端の研究成果を技術として生産現場に応用し、効率的で環境への負荷を少なくする生産管理を行うとともに、生産された水産物の安全・安心を保障するトレーサビリティ（生産、処理、加工、流通、販売等の各段階で食品の履歴を明確に調べることができるシステム）のもと、それらを消費者の皆様に届けるシステムを作ることです。これらを通して、地域の活性化に寄与するとともに、世界で起きている環境問題や食糧問題を地域の人々と考えていきたいと思っています。

また、当センターの大きな特徴の一つは、文理融合型の研究センターであることです。水産学というのは、非常に裾野が広く、生物が棲む環境から、水産

物が消費者に届くまでに自然科学や社会科学を含む多くの研究分野が含まれています。これまでの水産学は、個々の研究分野は互いに連携することなく、個別に行われていましたが、これでは本当の意味での水産学としては機能しません。本来の水産学は、人間の生活に深く関わる人間生活科学でもありますので、自然科学的手法で得られた技術が人間生活に生かされるためには、社会科学的手法が必要です。このことを念頭に入れ、文理融合型の新しい水産学を作っていきたいと考えています。

そのように考えていきますと、新しい水産学には、産官学に加え、住民の参加が必要なことが分かります。即ち、水産学の出口の一つには、住民の皆さんと考える食育やブルーツーリズムがあるのではないでしょうか。私達、研究センターの教職員は、生産現場の諸問題を解決するための研究ばかりではなく、住民の皆さんと一体となって、愛南町の持つ素晴らしい環境と食材を用いて、食育やブルーツーリズムを通して、都会の人々を呼び込み、地域活性化に貢献していきたいと願っています。

今後とも、住民の皆さんの支援・ご協力をお願いします。

愛大生が大活躍！

「愛南大漁まつり２００８」で、ぎょショックウルトラクイズや金魚すくい等、愛媛大学の学生がイベントを盛り上げてくれました。また、イベント終了後は、ごみ袋を手に会場内の清掃も行うなど、愛媛大学の法被がまぶしく輝いて見えました。

今後、西海地域を中心に、多くの学生が地域行事に参加されると思いますが、住民の皆さんも、積極的に学生と関わってほしいと思っています。